マンガ文化を振興する地方新聞

―高知新聞の事例を中心として―

岩崎保道 [1]

([1] 高知大学 人文社会科学系 教育学部門)

Local Newspaper Promoting the Manga Culture－Focused on a Case of the Kochi Shimbun

Yasumichi Iwasaki[1]

[1]*Kochi University, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit*

Abstract: This paper introduces a case of the Kochi Shimbun as a local newspaper that promotes the manga culture. The author summarizes the relation between newspapers and manga, describes the environment surrounding the manga culture in Kochi Prefecture, and then introduces the characteristic manga-related measures of the Kochi Shimbun.

キーワード:マンガ文化,高知新聞,地方新聞

Keyword: Manga Culture, The Kochi Shimbun, Local Newspaper

はじめに

本稿は,マンガ文化を振興する地方新聞の事例として,高知新聞の事例を紹介するものである.その展開として,新聞とマンガの関わりを整理し,高知におけるマンガ文化振興の政策的取り組みを説明したうえで,高知新聞におけるマンガに関わる特徴的な取り組みを紹介する.そもそも新聞とマンガは,物語マンガ,エッセイ,風刺,人物評など多様な関係が長い期間をかけて築かれてきた.今や新聞におけるマンガの位置付けは補足的なものではなく,豊かな生活文化の振興に果たしてきた貢献も大きい.特に,地方の文化・歴史を伝えるマンガや,その特性に主体を置いた連載マンガもあり,これらは四コマでなく,多くのコマで紙面を割いて毎週掲載しているものもある[1].

ところで,新聞におけるマンガ文化の振興は大衆娯楽の発展と大きな関係がある.戦後,映画や演劇,演芸など大衆娯楽の勃興とともに,娯楽雑誌が次々と刊行され,さらに,新聞を含むメディアが飛躍的に発展していった.大衆娯楽の広がりとともに,新聞とマンガは密接な関係を持つようになった.そのなかで新聞は,情報の伝達を第一の使命としているが,多様な情報が取り扱われていること,一般的に広い読者層を持つこと,逐次性・速報性に重点が置かれることなどが特徴である.本稿は,地方新聞である高知新聞に注目した.その理由は,以下の通りである.

第一に,高知県は横山隆一,横山泰三,やなせたかし,はらたいら,黒鉄ヒロシ,岩本久則,青柳裕介など,多くのマンガ家を輩出した.そのマンガ家と地元メディアである高知新聞は強い関わりがある.「土佐はまんが王国」といわれる土壌の形成と地元新聞の関係を明らかにすることは,地方におけるマンガ文化の発展を考察するうえで意義がある.

第二に,これまで地方新聞が果たしてきたマンガ文化の振興に関わる研究は希少であることから,これらを整理することは,新聞文化やマンガ文化を研究するうえにおいて参考になる.特に,一地方紙がマンガに関わる事業やイベント等を行うなどの事例は特筆すべき取り組みである.

第三に,高知県では,文化振興の目玉として,政策的にマンガ振興に関わる事業が精力的に行われており,その方向性は高知新聞が行うマンガ文化を振興する取り組みとほぼ一致する.そのため,官民が協働して実施する事業も多く,モデルケースとして注目する価値がある.

以上を背景として,冒頭で掲げた目的を果たすための検討を行う.

1．新聞とマンガの関わり

明治中,末期から長い間,日本の新聞マンガは北沢楽天とその門下生によってほとんど独占された形になっていたが,これらの時代は明治という古い背景のもとにあったジャーナリズムの上だけに,その表現方法も古く,発想も極めて明治的色彩を帯びていた[2].明治後期から大正になると,印刷,出版,流通のシステムが確立され,新聞や雑誌を購読する読者層が出現した.そのなかで新聞マンガといわれるものには,連載の物語マンガ,エッセイ,風刺,人物評など多種多様である.新聞のなかでマンガが独自の位置を占めるようになったのは大正初期であった.1921年に「時事新報」が日曜付録として「時事漫画」を付け,北沢楽天とその門下が担当した.また,岡本一平は「朝日新聞」において,「人の一生」や「漫画世界一周」などを連載した.昭和に入ると,新聞連載マンガの世界に新勢力が登場した.1929年に「読売新聞」の日曜版で創刊された「読売サンデー漫画」である.これは,新聞の紙面四ページを全部カラー印刷のマンガで埋めたもので,新聞連載マンガの予想できるキャラクター型を全部網羅するような大型企画であった[3].

戦後における新聞マンガの基礎は,昭和20年代において形成された.主要な作品や,中心的なマンガ家はこの時代から出発した[4].例えば,1946年に長谷川町子の「サザエさん」が「夕刊 フクニチ」（福岡）で連載が始まった.同年,手塚治虫の「マアちゃんの日記帖」が「毎日小学生新聞」（関西版）で連載が始まった.また,戦後間もない頃の政治マンガでは,まつやまふみお,清水崑,横山泰三,那須良輔が執筆していた.サラリーマンものは,毎日新聞に横山隆一の「デンスケ」,横山泰三の「プーサン」が掲載された.1950年代に入ると,子供が主人公の四コママンガとして,読売新聞に塩田英二郎の「ミーコちゃん」,根本進の「クリちゃん」が登場した.

２．高知におけるマンガ文化振興の政策的取り組み

高知では,マンガに関わる政策的な取り組みが積極的に行われており,マンガ文化の環境が形成された.2012年に高知県が主体となって「まんが王国・土佐推進協議会」（注1）を発足させ,官民が協力し県を挙げてまんが文化を推進することなどを目的とする組織が立ち上がった. また, 高知市「高知市文化振興ビジョン」（2012年）においては,「まんが文化を広げ活かす」とされ,①まんが文化の顕彰,発信,交流,②まんが文化の多分野への活用による地域振興,といったマンガ文化振興の方針が示された.さらに,高知市文化振興事業団が運営する横山隆一記念まんが館,「香美市立やなせたかし記念館 アンパンマンミュージアム」によるマンガ文化の振興も盛んである.そして「こうちマンガフェスティバル」（主催:高知市,こうちまんがフェスティバル実行委員会）,「全国高等学校漫画選手権大会～まんが甲子園～」（主催:高知県,まんが王国・土佐推進協議会,後援:高知新聞社ほか）,「全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐」（主催:まんが王国・土佐推進協議会,後援:高知新聞社ほか）は,まんが文化を全国に発信する大きなイベントである.2015年には四万十市で「しまんと漫博!」（主催:四万十市,四万十市教育委員会）が開催され,「深夜食堂」「山本耳かき店」の安倍夜郎,「四万十食堂」の左古文男等,四万十市に関わりのある作家の作品展が開催された.

３．高知新聞におけるマンガ文化の振興

高知新聞社は,板垣退助の創立した政治結社「立志社」の機関紙の流れをくむ.1904 年 9 月 1 日に高知新聞を創刊し,1941 年「土陽新聞」を吸収合併して高知県における唯一の日刊紙となった.その後,関連会社は 10 社となり,高知県内の情報媒体として圧倒的地位を占めるに至っており,2014 年 9 月には創刊 110 周年を迎えた [5]. 同紙の発行部数は,2015 年 3 月において朝刊 183,283 部,夕刊 115,280 部（県内市場占有率は 86%）である [6].なお,同社の編集指針の一つに「歴史と伝統の上に新しい文化を育て、豊かな環境を次代に引き継ぐ」としている [7].

同社とマンガとの関係は強く,高知県のマンガ文化の振興に大きな役割を果たしてきた.高知新聞社は「漫画ブームはすっかり定着した感がある.のみならず,日本漫画は世界にまで進出,漫画王国の存在を海外に知られることとなった.その中にあって,多数の作家を輩出し,自他ともに漫画王国をもって許しているのが高知県である.土佐の風土や県民性をつぶさに見れば,それも当然という感が深い.このような風土にあって,本社が漫画文化の振興に格段の意を用いるのは,これまた至極当然のことであろう」と述べた [8].本章は,その取り組み状況の一部について紹介する.

3.1 「土佐はまんが王国」

高知新聞は,1989 年の 1 月から 12 月にわたる毎月,「土佐はまんが王国」を連載した.その趣旨は,自由で大胆な発想により,高知のイメージ作りを提案するという企画だった.第 1 回目は「フジ三太郎」のサトウサンペイであり,第 2 回目は「フクちゃん」「勇気」などの横山隆一であった [9].図 1 は,横山が「横浜博」に伴い制作依頼を受けた 50m 壁画を前にしている様子が描かれている（注 2）.どこかユーモラスであり,読者を惹きつける強さを感じる.壁画の図柄も個性的で面白い.横山は「(漫画家の来県で）世間の視線を集めるのも一つの方法だろうが,世間の目を大きく見開かすことが大事だ.漫画で人を呼ぶのではなく,漫画的発想で人を引きつけることだ.その違いをちゃんと考えないと駄目だね」と述べている.第 3 回目は「ブカリトピア」「岩本武蔵」「閑話キューソク」「ボクの野鳥観察日記」「鳥神話」などの岩本久則であり,第 4 回目は「ツルモク独身寮」などの窪之内英策であった [10].図 2 は,岩本が 1988 年に高知市で開催された「まんがフォーラム」（高知市）において,土佐湾での鯨ウオッチングを強く提唱したところ,それが県予算の実現になったことを表す図画である.第 5 回目は「ヒラリ君」の井田良彦であり,第 6 回目は「モンローちゃん」「メロンちゃん」などの,はらたいらであった [11].はらは,高知新聞にマンガが掲載されたことについて「レベルが高かったねえ.とにかく高知新聞の選に漏れた作品を東京へ送ったら,入選していたもの.いつだったか,ある雑誌が全国から作品を募集して入選作を十点発表したら,そのうち六点が高知の人じゃったこともあったなあ」と述べている.第 7 回目は「アンパンマン」などの,やなせたかしであり,第 8 回目は「赤兵衛」「結作物語」「よのす

け」「日本史」などの黒鉄ヒロシであった[12].やなせは「十七歳の時だったか,高知新聞の懸賞漫画に応募して最優秀賞をもらったよ」と述べている.なお,やなせは,終戦直後に高知新聞社で「月刊高知」の記者をしていた.また,黒鉄は「県出身者に漫画家が多いのは事実ですが,それを土佐の風土とか批判精神おう盛とか無理にこじつけて考えません.あくまで偶発的だと考えているんですよ」と述べている.第9回目は「土佐の一本釣り」「土佐の鬼やん」などの青柳裕介であり,第10回目は「シャコタンブギ」「あいつとララバイ」などの楠みちはるであった[13].第11回目は「元禄遊女伝」などの矢野徳であり,第12回目は「改田昌直のアーバン世界」「ミステリーカクテル」などの改田昌直であった[14].以上の通り,著名なマンガ家が12回にわたり高知との関わりも踏まえ多様な切り口で語った.そもそも,地方新聞において,これだけの著名人が連続で執筆することは,マンガ家と新聞社の関係が築かれていたことに他ならない.特に,横山は高知とマンガの結び付きを意識し,黒鉄は高知にマンガ家出身者が多いことを"偶発的"と表現していること,また,はらが高知新聞のマンガ入選の水準の高さについて語っている点は興味深い.

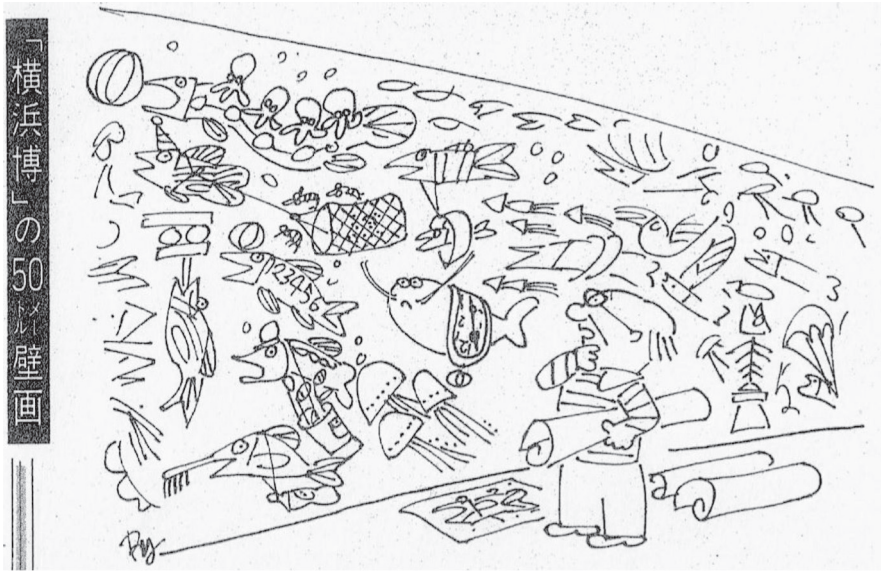

図1 横山隆一「土佐はまんが王国」（高知新聞,1989年2月21日）に掲載された図画（2015年8月6日に著作権者より引用許可を得た）

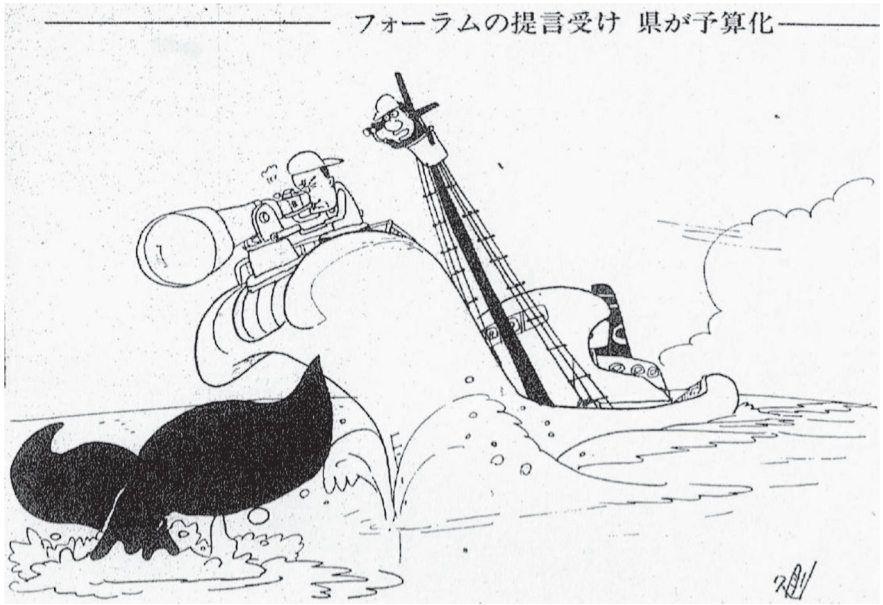

図2 岩本久則「土佐はまんが王国」（高知新聞,1989年3月21日）に掲載された図画（2015年7月31日に著作権者より引用許可を得た）

3.2 「黒潮マンガ大賞」

「黒潮マンガ大賞」は,高知新聞社が1989年に創刊85周年を記念して創設したものである.漫画文化のさらなる向上と優れた作家の発掘,育成を目指すこととした[15].2005年までは「コマ漫画」と「ストーリー漫画」の2部門で実施し,2006年からは「ショートストーリー漫画部門」に一本化した.同大賞は,ストーリー漫画に特化する形で,プロの漫画家として活躍できる才能を発掘する特徴を持つ.大賞,準大賞,入賞のほかに「編集者特別賞」があり,小学館が発行する漫画雑誌などへの作品掲載の道も開かれている.なお,応募は学生や社会人をはじめ,プロのマンガ家など,広く全国から寄せられた.応募総数は,2015年（第27回）のものは265人,284点であった.

3.3 「高新まんが道場」

高知新聞は,1987 年 1 月に「高新まんが道場」なるページの特設を決め,翌月に第 1 回分が発表された.特設ページは毎月一回,アマチュアの登竜門として解放され,青柳裕介が「道場主」となって応募作の審査,指導にあたった.紙面では一般公募の部の入選作以上だけでなく,県内でのリーダー的な存在である「高知漫画集団」「くじらの会」の両グループの会員作品を紹介し,競作した（注 3）[16].なお,入選作品は同社ウェブサイトでも紹介されている（注 4）.

3.4 連載マンガ

高知新聞では,1946 年 6 月 30 日にやなせたかしの「タマ吉とネギ子」を連載マンガとして掲載して以降,杉浦幸雄「チャキチャキ娘」（1960 年 1 月 1 日～1966 年 4 月 14 日）,中沢啓治「冒険児ジム」（1970 年 9 月 1 日～1970 年 11 月 21 日）,ビック鍵「ダンブル先生だあー!」（1970 年 11 月 23 日～1971 年 3 月 12 日）,井田良彦「ヒラリ君」（1982 年 4 月 1 日～1999 年 3 月 31 日）など,多彩な作品が掲載された. 1946 年 6 月 30 日から 2004 年 4 月 1 日の期間に 58 作品が掲載された [17].このように高知新聞は,戦後間もない頃から現在に至るまで,多くの新聞マンガを掲載した.

図3 村岡マサヒロ「きんこん土佐日記（web 版）」（2015年8月5日に著作権者より引用許可を得た）

3.5 ウェブサイトを活用したマンガ文化の振興

高知新聞では,ウェブサイトにおいて「土佐は漫画だ」と題し,村岡マサヒロの「きんこん土佐日記（web 版）」,「にゅーすけっち」などを掲載している.図 3 は,「きんこん土佐日記（web 版）」に掲載された四コママンガである [18]. 登場人物が土佐弁を話し, 日常生活の様子のなかに「笑える話」を盛り込んだ作品であり,大人から子供まで楽しめる作品である.

3.6 出版物におけるマンガ文化の振興

1999 年に高知新聞企業は,田所のりあき作品集「まんが土佐の笑いばなし」を出版した.市原（1999）は,「土佐の民話の特色は,笑い話だ.その笑い話は,架空の昔話よりも,現実的なまっことの話を好む土佐人の性格から,どこそこ村の誰それが,こんなおかしなことをしたという,現実的にあり得る話として語られ,笑いの主人公が実在している」と述べた [19].また,村岡マサヒロの「きんこん土佐日記」は,高知新聞社より発刊している人気シリーズである.

おわりに

以上のように, 高知新聞が高知のマンガ文化の振興, ひいては県民の文化振興に寄与してきた業績は大きい. それは,「土佐はまんが王国」といわれる環境形成における関わりの大きさでもある. また, 地域の風習, 方言などの特徴を伝える手段としても, 同社の新聞マンガは大きな役割を果たしてきた. ところで, 同紙が長きにわたってマンガ文化の振

興に関わり続ける原動力には,審査や事業内容のクオリティの高さにあると考える.作品のクオリティの高さを担保する要因は,審査の厳格さにある.例えば,「黒潮マンガ大賞」の歴代審査員には,やなせたかし,横山隆一,はらたいら,黒鉄ヒロシ,岩本久則,青柳裕介（順不同）など,錚々たる名が連なっている.

以上が本稿の検討結果である.今後についても,高知県における文化振興を牽引すべく,多様な事業やイベントなどの取り組みを積極的に推進することを望みたい.

［引用文献］

1)岡部拓哉,地方紙における新聞マンガの変遷と特徴,「マンガ研究」,vol.9,p.63,2006.
2)伊藤逸平「日本新聞漫画史」,造形社,p.49,1980.
3)呉智英,「現代マンガの全体像」,情報センター,p.116,1986.
4)石子順,新聞漫画史2,「昭和新聞漫画史」,毎日新聞社,p.254,1981.
5)高知新聞ウェブサイト,http://www.kochinews.co.jp/corporate/index.htm,2015年8月1日確認.
6)高知新聞,同書.
7)高知新聞,同書.
8)高知新聞社社史編纂委員会,「高知新聞100年史」,高知新聞社,p.417,2004.
9)高知新聞,1989年1月1日,2月21日.
10)高知新聞,1989年3月21日,4月20日.
11)高知新聞,1989年5月22日,6月22日.
12)高知新聞,1989年7月22日,8月10日.
13)高知新聞,1989年9月20日,10月22日.
14)高知新聞,1989年11月22日,12月21日.
15)高知新聞社社史編纂委員会,前掲書,p.418.
16)高知新聞社社史編纂委員会,前掲書,p.417.
17)高知新聞社社史編纂委員会「高知新聞 100 年史 記録集[資料・年表]」,高知新聞社,pp.172-173,2004.
18)高知新聞ウェブサイト,http://www.kochinews.co.jp/kinkon/kinkon.htm,2015 年 8 月 1 日確認.
19)市原麟一郎「漫画にいきる笑いの主人公」,田所のりあき「まんが土佐の笑いばなし 田所のりあき作品集」,高知新聞企業,1999.

（注 1）まんが王国・土佐推進協議会とは,多くの漫画家を輩出し,「まんが甲子園」の開催やまんが関連施設の開設等により「まんが王国・土佐」を築き上げてきた高知県が,官民が協力し県を挙げてまんが文化を推進し,「まんが王国・土佐」のブランドを確立するとともに,まんがをビジネスに活かし,コンテンツ産業の振興に一体的に取組むことにより,経済の活性化と雇用の創出につなげていくことを目的とする組織である（高知県ウェブサイト,http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/141701/2014090500102.html,2014 年 9 月 14 日確認.）.

（注 2）横浜博覧会（横浜博）は,市制 100 年,横浜港開港 130 年を記念して 1989 年に横浜市で開催された.

（注 3）「高知漫画集団」は, 南国土佐の“いごっそう精神”を発揮して自由で奔放な漫画を創造していこう…と 1978 年 9 月,高知漫画集団を結成.漫画の原点である一枚漫画を主体に似顔絵イベントへの参加など,地域に根ざした漫画文化の普及,発展に努めている（澤本英世）.「くじらの会」は,「漫画と酒を愛する個性派集団」.高知県内のこども会,小・中学校などで“子どもまんが教室”を開催するなどまんがの裾野を広げる活動を多岐にわたって行っている（樹夏夢）.高知新聞ウェブサイト,http://www.kochinews.co.jp/10manga/syudan.htm,2015 年 8 月 12 日確認.

（注 4）入選作品は,高知新聞ウェブサイト,http://www.kochinews.co.jp/10manga/doujou.htm,で紹介されている.

平成27年（2015）10月９日受理
平成27年（2015）12月31日発行